

関西中国女性史研究会編

ジェンダーからみた 中国の家と女

東方書店／2004年2月／389頁／4800円



松尾肇子

はじめに

既婚の中国女性と話すと思議に思うことがいろいろあった。結婚しても姓がかわらないこと、夫も子供も故郷に残したまま単身留学に来ていること、食事は余裕さえあれば買えばいいこと、などなど。けれども何人かに理由を尋ねてもその返事は必ずしも一致しないし、答えが腑に落ちないことも多かった。「日本とは違うから」という返事では何もわからない。日本と中国とは何がどう違うのか。単純に男女平等だからという理由ではないらしいことは想像できたし、制度の問題だけではないことも分かった。加えて、「女は天の半分を支える」から「女は家へ帰れ」へ、「下崗」「女兒失学」へ、一体何が、どこでどうして起こっているのかをつかみきれないまま次々と新しい言葉が運ばれてくるほど、ここ二〇年余りの中国女性をとりまく状況の変化は急速である。

本書は、そんな中国初心者者の疑問に答えられる。そして「家」や「女」は、私

的領域に止まらず、社会と結ばれた問題なのだということを明らかにする。

構成と内容

本書は論文集である。ただし、大学生を読者対象とするため、原文をそのまま引用するような硬いものではなく、一般読者にも比較的読みやすい。南北朝時代四世紀以降一九七〇年代までを対象としている。この長い年月にわたって、家は、時代と社会のなかでその内容を変化させつつ存在してきた。そしてそれに対する女の対処、男のかかわり方も一様ではない。

以下、構成と内容を紹介し、若干のコメントを加えたい。

全体は六部一六編の論文で構成されている。以下に目次を掲げる。

I 女の役割と家

隋唐時代の医書にみえる出産観——家の継承と女性・中純子

中国近代における家事科教育——その導入と抵抗・杉本史子

何香凝——家と政治に生きた女性指導者・竹内理樵

II 女の規範と家

宋元から明清時代の家法が規定する男女の役割・臧健

賢ならざる婦とは——女訓書に見る家と女・林香奈

白話小説に描かれる商家の妻・伊藤徳子

III 語られる家と女としての妻・大平幸代

士大夫が語る家の中の女たち——ジェンダーの視点からの古典研究の試み・野村鮎子

清末の客家・五世同堂の女性たち・寛久美子

IV 家を拒む女、家を求める女

自梳女の家——広東の婚姻文化・成田静香

生家を出た娘たち——民国期の恋愛小説を読む・濱田麻矢

保母たちの家への渴望——王安国『富萍』と『鳩雀一戦』について・劉小俊

V 女性解放論者の家と妻

胡適と江冬秀——民国時期一知識人の家・

西川真子

徐志摩の結婚と離婚・鮑家麟

VI 家のかたち、女のすがた

「五口之家」と「一家百余口」——唐宋袁雪芬と上海の越劇——家と女をめぐって・中山文

第一部は、家の中の性別役割として三つの面を論じている。

中論文は「産む性」としての、それも男児を産む道具としての女の役割を取り上げる。医書には男女産み分けのみならず腹中の女兒を人為的に変性させる方法も記載されていること、そしてこれら医書が広く読まれていたことを指摘する。

現在の中国における不自然に高い男児の出生比率は人権問題として非難を浴びたが、二千年の歴史を有するのである。

杉本論文は、日本の女学校における家事科教育を中華民国の女子教育に導入しようとして失敗した過程を明らかにする。

中国の富裕階層は家内の仕事を使用人に委ねる。その実態は第六部大澤論文に詳

しい。都市中間層が生まれる以前の民国時代に女子が教育を受けられた階層は、こうした富裕層すなわち主婦が家事を行わない階層であり、彼女らはアメリカ風の社会性のある女性をモデルとして選んだのである。現在でも都市の富裕層は、農村からの出稼ぎ女性やリストラされた女性を住み込みや通いの「保姆」や「阿姨」として雇うし、日本人女性の多くが感じるだろう後ろめたさはない。最近中国でも都市部の若い女性に専業主婦願望が高まっているが、それが決して日本人のイメージする専業主婦像ではないことは注意されるべきであろう。

竹内論文は、夫となった廖仲愷を通じて革命思想を学んだ何香凝が、廖仲愷の死後には、その未亡人として国民党内に高い地位を維持したことを論じる。家庭内の寡婦の地位が高いことは第三部収録の算論文に詳細に論じられているが、竹内は政治の場においても同じ力学が働いたと言う。孫文夫人宋慶齡、蒋介石夫人宋美齡、周恩来夫人鄧穎澄ら、中国近代史には著名な政治家夫人が多い。毛

沢東における江青を以って終わりを告げたようだが、近代日本にはなかったこのような女性と政治の関わり方は興味深い。かわつて現在の中国中央政界においては女性政治家の退潮が著しい。中国女性が政治的発言力を伸ばすにはどうすればいいのか、打開は簡単ではないように感じられる。

第二部は、旧時女性に課せられた規範がいかに機能したかを家との関係で考察したものである。林論文は、妻に対する規範について論じる。定義のあいまいな「賢」に対して「不賢」は極めて具体的かつ厳しく、家の外から来た妻に忍従を強いることによって家の安泰と発展を図ったこと、一方夫に対しては嫁取りの基準を示し、まれに再婚を禁ずる程度であること、つまりは家庭内の秩序の崩壊はすべて妻に転嫁されたとする。国の崩壊の責任が一人の傾国の美女に背負わされたように、どこの家も破家の美女が生まれる可能性を秘めていた。それを防止するためには、道徳を教え導く女訓書だけでは十分ではないのだろう。臧健論文から

は、明清では再婚禁止などの項目が宋朝よりも厳しくなったことなど、妻の実際の行動規範として機能した家法の影響力の大きさが分かる。また商人の社会でも女性に対する規範は異なるものではなかったことを伊藤論文は論じている。これらの規範は江戸時代には翻案されて日本女性にも要求され、今でも女のおしゃべりや自己主張の強さが非難の対象となるなど、ここに論じられる規範は過去のものとなったようであるが、両国ともにその影響を引きずっているといえよう。

第三部では知識人がその作品において女性をどのように語ったかを考察する。大平論文は、婚姻が一族同士のものであった六朝時代のエピソードを題材に、夫婦はそれぞれ実家の代表選手であり、結婚は家門を巡る攻防戦の様相を呈し、外部の人間の興味の的でもあったことを論じる。結婚が単純に夫婦二人だけの問題ではないことは現在もあまり変わらないが、結婚した女性は改姓して婚家の人間になるという考えが強かった日本と、あくまでも他家の人間であることを示す中国と、

その感情の理解は難しいのかもしれない。野村論文は唐宋時代の科挙と古文復興とが、士大夫階層の核家族化を進め、男性に家庭内の女性について語る手段を得させたと述べる。算論文は、纏足に反対した黄遵憲の文章から、彼が大家族の中の女性たちの姿をいかに見たのかを解き明かす。野村論文の趣旨を具体化したといえよう。なお第三部は富裕階層についての論考であるが、庶民階層におけるそれはどうだったのかについても知りたいところである。

第四部では、結婚しない意志を表すために既婚女性と同様に髪を結い上げる「自梳女」、恋愛を発見してしまった未婚女性、住み込み家政婦「保姆」といった、結婚の外にあった女性が家とどう向き合ったかが論じられる。自梳女の中には女性同士で共同生活したり、自分の家を持つたりした者もあり、前近代では珍しい存在である。そして生きるための多様な家に加えて、死後の祭祀空間も多様であった。しかしこれは例外であり、普通には結婚しないということは実家とのつ

ながりを絶てないということだ。近代的自我に目覚めて実家の力の及ばないところへ脱出しようとしても、恋愛し結婚した結果は別の家が残っているだけである。濱田論文の若い女性主人公たちの姿は、日本のそれと極めて近い。劉論文では、住宅難の七〇年代上海を舞台に、住む場所としての家を手に入れるために養子を迎えたり同じ境遇の女性に取り入ったりと様々に画策する保姆たちの姿が取り上げられている。家とはまさしく不動産としての家が根本なのだという意味で、他の論文とは家の捉え方が異なる。しかし、家を持つことが人生の大きな目標であるのは、普遍的ではないだろうか。第四部の論文三篇の女性たちは、一九世紀から二〇世紀前半の珠江デルタ、五四時期から抗日戦争時期までの都市、七〇年代上海と、いずれもかなり限定された時期と場所における特殊な存在を取り上げたという点で共通する。中国に長く普遍的に存在した結婚の外にある女性として、妓女を題材とした論考があれば、これら三編の論文の意味もより明確になったので

はないかと思う。

第五部は、胡適と徐志摩という著名な二人の近代文学者が、ともに親の決めた相手と結婚していること、そしてその結婚のなかで夫も妻も苦しみもがいたことを論じる。胡適はアメリカに留学中、故郷にいる文盲の婚約者と文通による恋をしたいと強く願う。それは先進的な男女の関係だったが、彼女には全く理解できなかった。だが、人生を共にする中で手紙を書くまでに成長する女性の姿は、新しい時代を迎えた中国を象徴して、胸が熱くなる。鮑論文では、徐志摩の離婚の原因は自分の父親から妻への性暴力だとする。妻の妊娠に対して不義の子ではないかと疑い堕胎を要求する夫も、捨てられる妻も、ともに哀れである。義父から嫁へのドメスティックバイオレンスが古くから存在したことは俗諺などからも想像されるのだが、研究となると全く十分であり、今後の進展の待たれる題目のひとつである。

第六部は、問題の総体的な論述である。大澤論文は家とは何かを問いかけ、本書

全体を整理していると言えよう。伝統的な家は大澤が「家族」と称する血縁者に加えて非血縁者を多く抱えて「世帯」を構成し、夫婦・親子・兄弟以外にも、複雑な関係が存在する。唐宋時期には家族単位の結合が徐々に強まり、男児を残そうとするようになる。また非血縁者との関係において、大澤は、鞭打つ行為が誰から誰に行われたかを分析することで、唐朝には主人が家の秩序を統制し妻は主人の家の圏外にあったのが、宋朝になると夫の立場が強化され、妻は家を管理する権限を手にしたと結論する。中山論文は共産党と越劇の関係を、強い父とその父に愛された娘の関係になぞらえる。社会の様々な人間関係において、家族関係が中国人の行動の規範となつていると言われるが、ここでも例外ではない。

おわりに

家は女だけで構成されているのではなく、男性もそこに暮らしていた。しかし、外の世界も有する男性と違い、ほとんどの女性にとっては家の中が世界のすべて

だった。女が家を拒否しても別の家にか居場所を求められなかった時代があった。そしてそれは今でもあまり変わっていないのかもしれない。

はじめに書いたとおり、本書が取り上げるのは七〇年代までであり、今現在を対象とした論考が収録されないのは残念である。たしかに現在だけを切り取って論ずるのでは問題を正しく把握できないのではあるが、歴史をpushした上で今日の事象の分析に挑戦すればおもしろかつただろう。また主に文字資料による研究であるため、古代や周辺に位置した人々についての言及がほとんどないのも惜しまれる。

とはいえ、長い歴史を有する中国において、女があるいは男が、家といかに切り結んできたのかを概観するのにこの上ない本であることは間違いないし、様々な今日の問題を読み解く鍵にあふれていることを述べておこう。

詞源研究会 編著

宋代の詞論——張炎『詞源』

（中国書店・二〇〇四年三月）

中国では詩詞という呼称は一般的であるが、日本では、詩が漢詩・唐詩として広く知られるのに対して、詞を知る人は少ない。書名をみて「詩論」の誤植だと思ふ人もあるのではないだろうか。詞は唐の時代の民間歌謡にはじまる歌辞文芸で、宋朝では洗練を加え、詩よりも高雅な韻文形式だと認識されるに至った。しかし宋王朝の滅亡と呼応するように急速に衰退し忘れられ、音楽を失った詞が韻文の一種として復興したのは清朝以後のことである。

副題の張炎は宋滅亡後元王朝に仕官しなかった遺民と呼ばれる一群の人々の一人であり、『詞源』は張炎晩年の著作と言われる。失われた祖国と失われたつづある詞を愛惜するかのよう、実作者としても高い評価を受ける彼の、学識を傾けた文芸論が語られている。

本書は、『詞源』巻下の訳注である。

なぜ巻下か。巻上の音楽論は詞が音楽を失つたために後世に直接的には影響しなかったのに対して、歌辞論である巻下は韻文論として時代と文体を越えて読まれたからである。その篇目は「序・音譜・拍眼・製曲・句法・字面・虚字・清空・意趣・用事・詠物・節序・賦情・離情・令曲・雜論・作詞五要」。

訳注とはなにか。ひとつひとつの術語に日本語訳を与え、その言葉が有する背景を記す。だから、読みやすいとは言えない。現在の出版界の流れに逆らうような本である。しかし、文献のデータベース化の目覚ましい進展のなか、検索は簡単になったがそれを研究の成果にすることは必ずしも成功していると言えない現在、「検索の後」のあり方のひとつのモデルといえるかもしれない。本書の注は、詞論・詩論・文論などの文学論のほか、人物評・書論・画論といった文芸批評にも目配りし、中国芸術論の総合的な俯瞰を試みている。それによって知識人の精神世界の

構成を窺おうとするものである。なお、本書には諸本異同表、引用詞の日本における訳詞の所在など、四種の付録がつけられている。それらもまた詞を研究するにあたって有用である。若干の訂正を記す。一頁『周易』↓『禮記』、三五頁『月禮』↓『月令』、一二二頁『戊角』↓『戌角』、一八九頁『長戌客』↓『長戌客』、三〇九頁『夢梁錄』↓『夢梁錄』。最後に最近二〇年間に出版された詞に関する書籍を挙げるので参照された。今後は本書を基礎として、当該分野の発展が望まれる。（松尾肇子）

村上哲見『宋詞の世界』大修館書店 あ

じあブックス、二〇〇三。

中田勇次郎『読詞叢考』創文社、一九

九八。

中田勇次郎『歴代名詞選』集英社 漢詩

選、一九九七。

宇野直人『中国古典詩歌の手法と言語

——柳永を中心として』研文出版、

一九九一。

中原健二他『宋代詩詞』角川書店 鑑賞

中国の古典、一九八八。

佐藤保『宋代詞集』学習研究社 中国の

古典、一九八六。